



SUSTAINABILITY

- 持続可能な社会のためのサステナブルアクション
- 目指すのは世界一クリーンなリーグ
- Be supporters! いくつになってもワクワクしたい、すべての人へ
- Jリーグと社会をつなぐ活動の原点



9月、静岡県を中心に猛威を振るった台風15号は記録的な豪雨をもたらし、試合の中止やホームタウンに断水、土砂災害などの甚大な被害をもたらした。近年著しい気候変動は様々な社会活動の持続に影響を与え、スポーツの安定的な事業の持続にも多大な影響を与えている。被害を受けた静岡県では、清水エスパルス、ジュビロ磐田、藤枝MYFC、アスルクアロ沼津の静岡4クラブが復興支援活動を行い、募金や物資提供などの支援の輪がJクラブを通じて全国に広がった。日常的なホームタウン活動や社会連携活動に加え、「ソナエル東海」などを通じて災害対策への意識が高いエリアならではの連携が迅速な対応を後押しした。

写真提供 清水エスパルス、ジュビロ磐田(右)

持続可能な社会のためのサステナブルアクション

Jリーグ30周年を機に、本格的な環境対策に着手。

- ▶ 気候変動の解決へ、2023シーズンより全試合で二酸化炭素排出量を可視化。削減できない分のカーボン・オフセットを実施。意識変容と行動変容を促す。

2021年にJリーグは環境省と連携協定を締結し、同省とは、連携協定を締結した1年間で定期的に環境問題に関する定期勉強会やJリーグ・Jクラブの環境への取り組みの共有を行い、それらを通じて生の営みの原点である環境問題への対策が、自らの事業の持続性を担保するうえでも不可欠だと改めて認識した。さらにJリーグは2023シーズンより、ホームタウン活動、シャレン!活動といった地域社会と連携する活動に加え、自らの活動の持続性の担保と、持続可能な社会の双方を実現するための活動として「サステナブルアクション」に本格的に取り組むと7月に実施した締結

1周年記念イベントで発表した。
Jリーグ30周年を迎える2023シーズンはリーグ全体で行う環境対策への活動としてJリーグ全公式試合で二酸化炭素排出量を可視化し、削減を目指しながらカーボン・オフセットを実施する。訪れるファン・サポーターと共に気候変動を学びながら二酸化炭素削減を目指す。同時にこれらの活動が持続する仕組みづくりにも着手。国内の協働企業、ひいてはアジア、世界でアジェンダを共にするスポーツ団体とともに環境対策のロールモデルとなり、こうした活動をスポーツ界から積極的に発信していくことも目指していく。

2023シーズンから取り組むサステナブルアクション



2022年7月22日に行った環境省との連携協定締結1周年記念イベントで、山口壯環境大臣(当時)を招いて2023シーズンからの取り組みを野々村チェアマンが宣言

Jリーグの取り組み

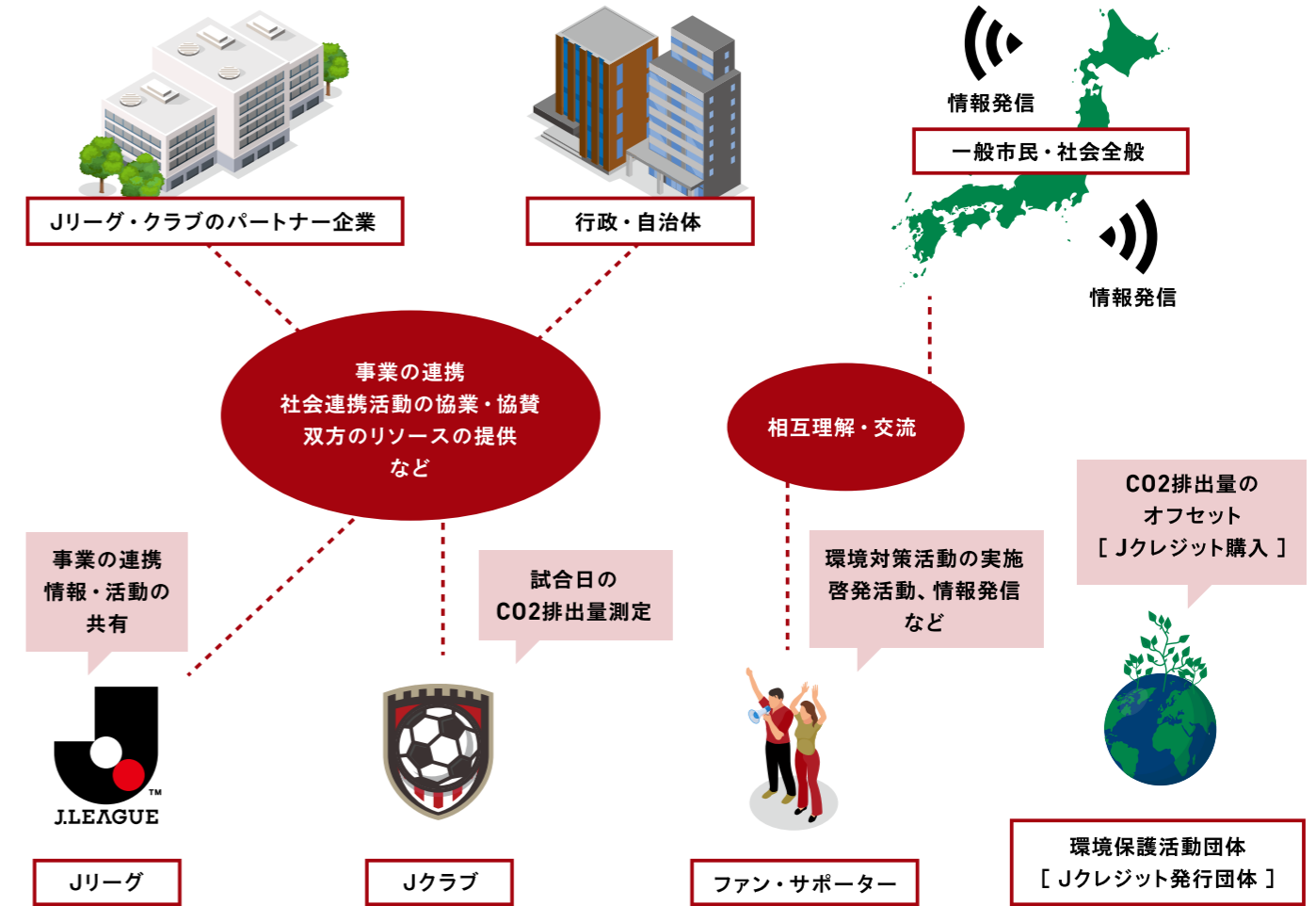
2023シーズンの実施に先駆けて、10月22日(土)に国立競技場で行われたJリーグYBCルヴァンカップ決勝で二酸化炭素排出量の計測を実施。

決勝当日は「サステナブルステーション」を設置して、フードドライブや不用品回収および寄付(小型電気製品、衣類)を行い、シャレン!活動やSDGsの告知を行った。

- | | |
|---------------|---|
| 実施事項 | <ul style="list-style-type: none"> ・Jリーグ全公式試合で二酸化炭素排出量の可視化、カーボン・オフセットを実施 ・併せてJリーグ全体での環境対策意識を高め、活動や情報の共有、環境対策に関連する事業の関係組織との協業を推進 |
| 目的 | <ul style="list-style-type: none"> ・フットボールの持続性を担保 ・スポーツビジネスにも求められる持続可能な社会のための活動を推進 ・全国規模の社会連携活動の推進 |
| 取り組む意義 | <ul style="list-style-type: none"> ・全国への発信力を活用 ・クラブ、ホームタウン、パートナー企業等、様々なジャンルの組織との関係性を活用 ・スポーツ界や連携する諸外国への旗振り役を担う ・一人一人の意識・行動変容を促す |

カーボン・オフセットとは
(環境省ホームページより)
日常生活や経済活動において避けることができない二酸化炭素等の温室効果ガスの排出について、まずできるだけ排出量が減るよう削減努力を行い、どうしても排出される温室効果ガスについて、排出量に見合った温室効果ガスの削減活動に投資すること等により、排出される温室効果ガスを埋め合わせるという考え方。

Jリーグによる気候変動対策における関係各所との連携イメージ



Jクラブの取り組み

Jクラブの中でもいち早くゼロカーボンをめざして具体的な行動を起こしたのは清水エスパルス。2007年12月から「エスパルス エコチャレンジ」を掲げカーボン・オフセットをスタートし、2010年、2012年にはその活動が認められ環境大臣賞を受賞。「エスパルス エコチャレンジ」では協業パートナーを得てクレジットを購入するだけでなく、ホームゲームでの環境対策、ファン・サポーターへの告知や相互活動、ホームタウンでのごみの分別回収への協力、産学官連携による環境問題解決活動などを継続的に実施。活動の一環である「静岡市シェアサイクル事業PULCLE(パルクル)」は「2021Jリーグシャレン!アウォーズ」でパブリック賞を受賞した。



目指すのは世界一クリーンなリーグ

環境対策をスタートに、様々な社会課題にリーグ全体で取り組む

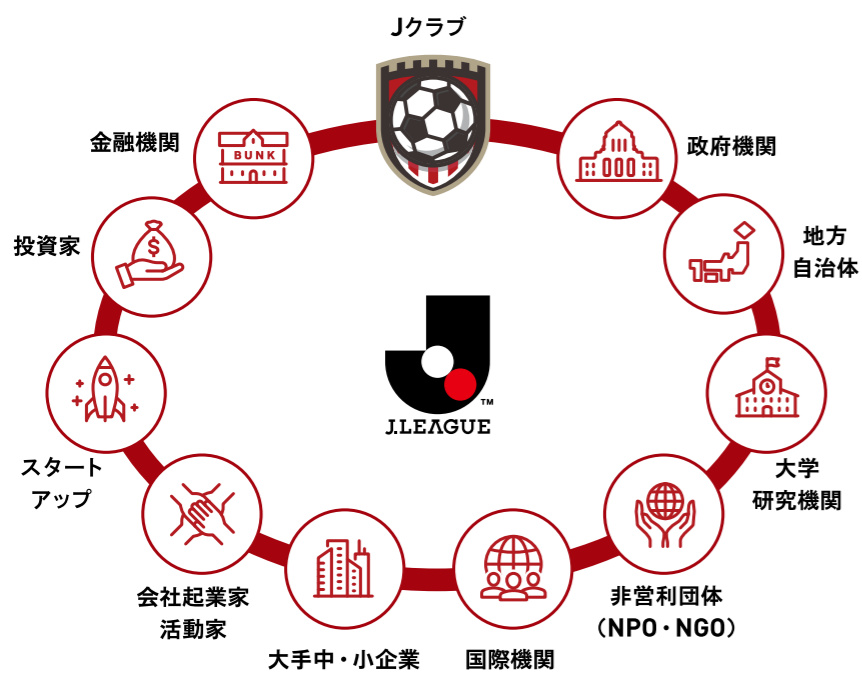
▶ スポーツのチカラを活用し、世界一クリーンなリーグを目指す

スポーツを通じた豊かな社会づくりという理念を具現化するために、JリーグはJクラブ、ファン・サポーター、自治体や企業と連携し、スポーツ振興活動から社会課題を解決する活動にいたるまで、開幕から30年の歴史の中で様々な活動を行ってきた。2023シーズンからは全クラブがかかわる持続可能な社会のための活動にリーグ全体で取り組む。

活動の推進には、Jリーグ、Jクラブ、ホームタウン、企業や組織、学術機関などより一層連携を強化することが不可欠であり、日頃行うホームタウン活動、シャレン!活動などを「サステナブルアクション」と捉え、Jリーグとしてハブとなるコミュニティーサークルを広げ、社会の課題解決に取り組んでいく。

Jリーグは部となって取り組むサステナブルアクションのイメージ

Jリーグがハブとなるコミュニティーサークルを広げて、社会の課題を解決していく。

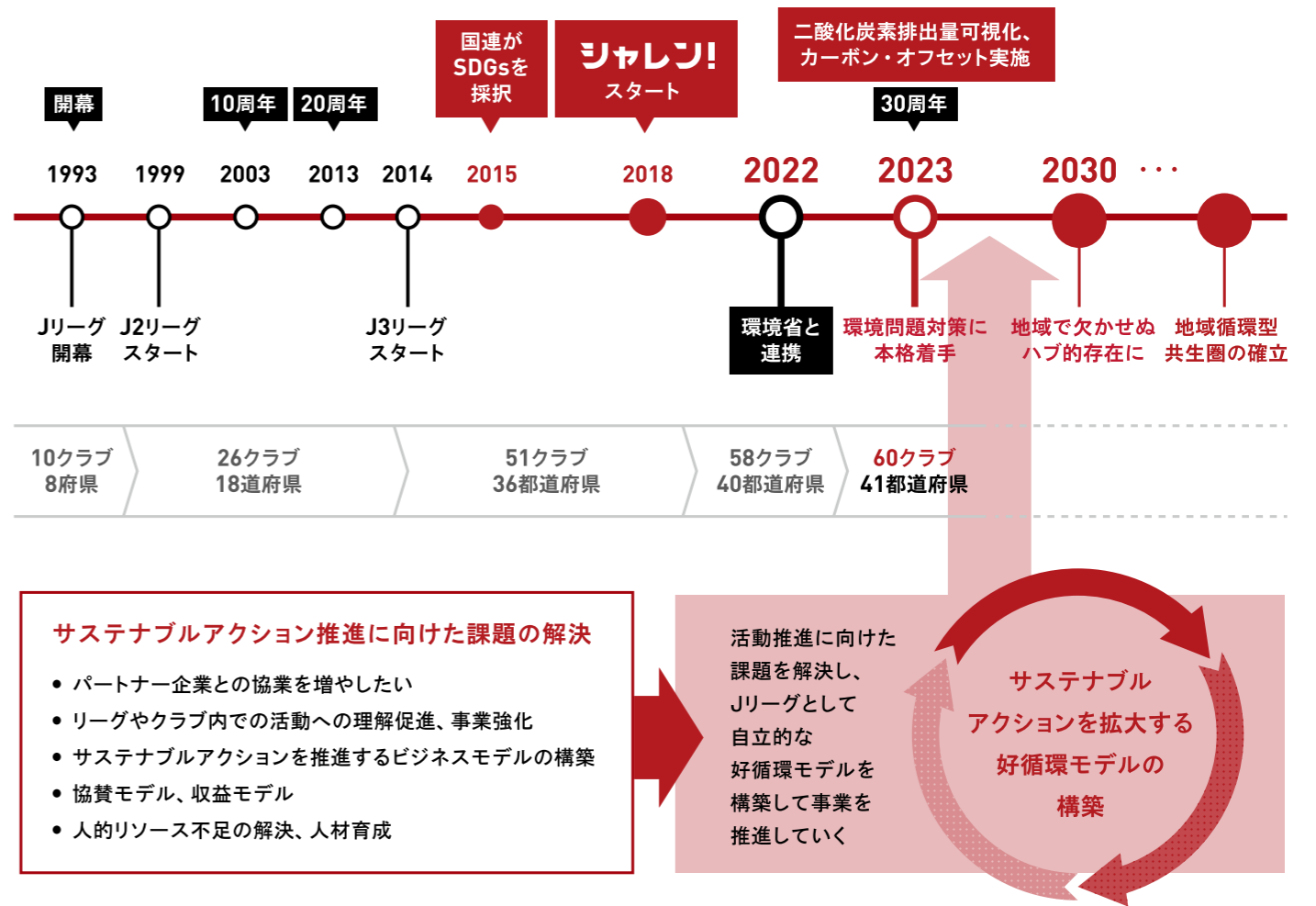


人権	多様性	安心安全なスタジアム
健康	ハラスメント撲滅	アンチドーピング
環境	フェアプレー	公平
地域	セーフガーディング	幸福
平和	交渉	etc.

サステナブルアクションのステップフローイメージ

1993年のJリーグ開幕から、各Jクラブはスポーツ振興活動から地域の活性化を図るホームタウン活動を行い、活動の幅が広がり、今では地域の課題解決や地域社会のハブとなり、スポーツを超えたつながりを広げ、40都道府県58クラブが年間2万回を超えるホームタウン活動、シャレン!活動を行っている。

これらの活動を推進する基盤を強化し、個々のクラブのみならず地域を越えた全国的な活動を展開することで、Jリーグ、Jクラブが地域の機能の一つとなるような、欠かせないハブのような存在になり、近い将来に地域循環型の共生圏を確立することを目指して、サステナブルアクションに取り組んでいく。



- サステナブルアクション推進に向けた課題の解決**
- パートナー企業との協業を増やしたい
 - リーグやクラブ内での活動への理解促進、事業強化
 - サステナブルアクションを推進するビジネスモデルの構築
 - 協賛モデル、収益モデル
 - 人的リソース不足の解決、人材育成

活動推進に向けた課題を解決し、Jリーグとして自立的な好循環モデルを構築して事業を推進していく

サステナブルアクションを拡大する好循環モデルの構築

シャレン!

レポート

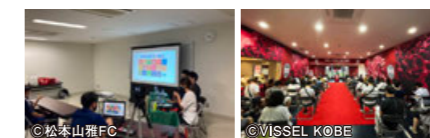
Jリーグは、5月10日に全58クラブのホームタウン・社会連携(シャレン!)活動の中から、特に社会に幅広く共有したい活動を表彰する「2022Jリーグシャレン!アウォーズ」を開催し、各賞の受賞活動を決定した。

開催実施
3回目

- 選考対象 2022年度Jリーグ全58クラブ(今年度入会のいわきFC含む)の2021年度の活動
- 選考参考について ファン・サポーターの一般投票を実施し、最終選考の参考とした。投票数は約8,000票



ソーシャルチャレンジャー賞
ゴミで繋ぐ未来へのパス、グルージャごみゼロPJ
[いわてグルージャ盛岡]
FC琉球県産品&子ども応援プロジェクト
[FC琉球]



パブリック賞
スタジアムトイレに生理用品の設置と生理への理解
[松本山雅FC]
神戸市新型コロナワクチン接種会場の運営協力活動
[ヴィッセル神戸]



メディア賞
Be supporters!サポーターになろう!
[カターレ富山]
サッカーだけじゃない、地域で共創する夜のスタジアム
[ガイナレ鳥取]

Be supporters! いくつになってもワクワクしたい、すべての人へ

Jリーグオフィシャルパートナーが取り組む社会連携活動

ひとりひとりに、ウエルネス。
Suntory Wellness

▶ 2022Jリーグシャレン!アウォーズ「メディア賞」を受賞

Jリーグが推進する「シャレン!」活動は、社会課題や共通のテーマ（教育、ダイバーシティ、まちづくり、健康、世代間交流など）に、3者以上の地域の人・企業や団体（営利・非営利問わず）・自治体・学校などとJリーグ・Jクラブが連携し取り組む活動と位置付けている。Jリーグシャレン!アウォーズ2022では、カタレ富山とJリーグのサポーターングカンパニーであるサントリーウエルネス株式会社が協働して推進している「Be supporters!（サポーターになろう!）」が「メディア賞」を受賞。「いくつになってもワクワクしたい、

すべての人へ」をテーマに、県内複数の福祉施設の高齢者がサポーターになることで、カラダもココロも動かしてワクワクする参加型プロジェクトだ。この活動はサントリーウエルネスが主体となって複数のクラブに展開している。2022年も様々な「幸せな物語」が生まれ、全国メディアに取り上げられるほど大きな反響を呼んだ。またJリーグオフィシャルパートナーが複数のクラブと本格的に取り組んだ初の事例として、関係各所からも大きな関心が寄せられている。

「Be supporters!」とは

高齢者施設で過ごす高齢者や認知症の方など、普段は周囲に「支えられる」機会の多い方が、サッカークラブの「サポーター」となることで、クラブや地域を「支える」存在になっていくことを目指すプロジェクト。「支えられる人から支える人へ」をコンセプトに、2020年12月よりサントリーウエルネス株式会社がJリーグの計4クラブと協働して推進。



2021年の「カタレ富山」では 県内 30 施設にのべ1,000人、最高齢 98 歳のサポーター が新たに誕生した。

2022年度の施策

2022年度は9月19日の敬老の日に向けて、全58クラブと「#サポーターになつてみた」(SNS投稿)、10クラブと「人生の先輩からのエール」(横断幕掲出)、4クラブと「ベーシック」(ガチサポ)を実施。参加した高齢者の中には、要介護度が改善されたように見えるほど元気になった、普段笑顔を見せない方が笑顔になった、食事量が増えた、試合の日は眠れるようになったなどの嬉しい効果が見られる方も。

58
クラブ

1st STEP 「#サポーターになつてみた」(SNS投稿)



10
クラブ

2nd STEP 人生の先輩からのエール (横断幕掲出)



4
クラブ

3rd STEP ベーシック (ガチサポ)

敬老の日特別企画

1st STEP 「#サポーターになつてみた」



9月7日(水)~9月22日(木)の17日間実施
ファン・サポーター、お年寄りが参加
Twitter、Instagramで展開

「#サポーター
になつてみた」
をつけて投稿



2nd STEP 「人生の先輩からのエール」



10クラブが参加 | 山形、町田、川崎F、富山、C大阪、神戸、鳥取、山口、北九州、鹿児島



10クラブで計 74 施設 1,434 人
(最高齢 107 歳) からのエールが集結!

10クラブの各地域の高齢者施設で過ごす「人生の先輩」からの手書きの「エール」がかかれた横断幕を、敬老の日に近いホームゲームに掲出



「命つきるときまでサッカーを楽しみなさい」(107歳)

クラブハウスなどのクラブ関連施設でも掲出。試合日の掲出の際はメッセージをくださった高齢者の方々をご招待したクラブも



3rd STEP 「ベーシック (ガチサポ)」

4クラブが参加(川崎F、富山、神戸、山口)各クラブがホームタウンの高齢者施設と一緒に取り組み。



試合前、試合当日、試合後の3つのステップで、施設から入所者・職員がみんなで応援。

試合前	当日	試合後
サポーター応援練習	サポ服をつくろう!	思い出を日記に
推し選手を決めよう!	カタチから入るも良し	選手へ思いを届けよう!
クラブ色に染めよう!	試合を観よう	選手との交流会

どなたでも気軽に参加できる応援プログラムを開発

Jリーグと社会をつなぐ活動の原点

年間2万回を超えるホームタウン活動とチャレン!活動を実施

▶ サステナブルアクションの基盤に。

Jリーグは1993年の開幕から来年で30周年を迎えるが、開幕からこれまでの歩みの中で、スポーツを通じた豊かな社会づくりを理念に掲げ、スポーツ振興、地域振興を目的としたホームタウン活動、地域の課題を解決するチャレン!活動を行い、近年では年間2万回を超える活動を行っている。約30年の歩みの中で、こうした活動は、Jリーグと地域社会をつなぐ接点となり、今では地域に欠かすことができない恒久的な活動に発展している活動も少なくない。

また、活動の多くは「持続可能な開発目標(SDGs)」を推進する活動となり、スポーツに関わる組織がこうした活動を推進することで、より多くの人々が意識変容や行動変容を起こすことが期待されている。

2023シーズンよりリーグ全体で環境問題への対策に本格的に取り組むにあたり、現在行われているホームタウン活動やチャレン!活動は今後行うサステナブルアクションの重要な基盤となる。

Jリーグホームタウン活動調査2021年度(2022年4月発表)

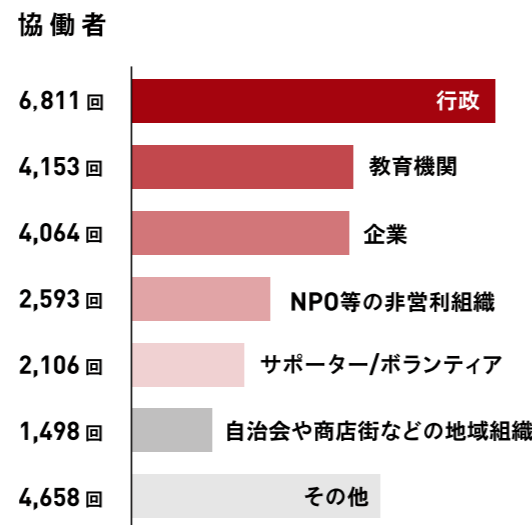
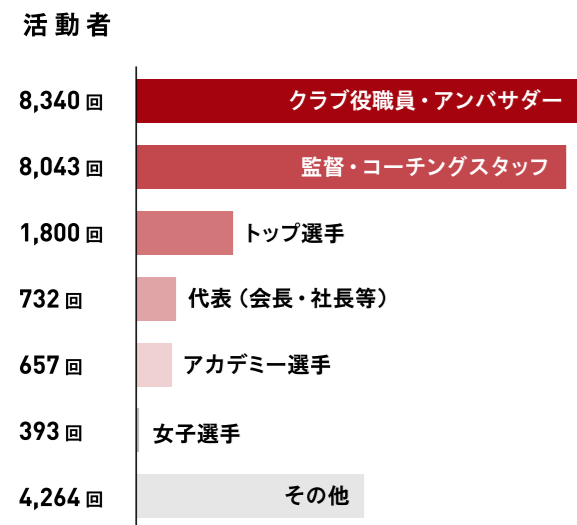
- 実施期間 2021年1月1日～12月31日
- 活動場所 ホームタウン及び活動区域内での活動を対象とする。また災害被災地への支援や国外等での社会貢献活動は、ホームタウンまたは活動区域外であっても対象とする。
- 活動者 クラブ(株式会社、および関連する社団、NPOなど)に所属し、または直接の契約を有し、またはクラブを公式に象徴する、あらゆる者による活動を集計対象とする。

年間活動回数 **21,782回**

うちチャレン!活動回数 **2,144回**

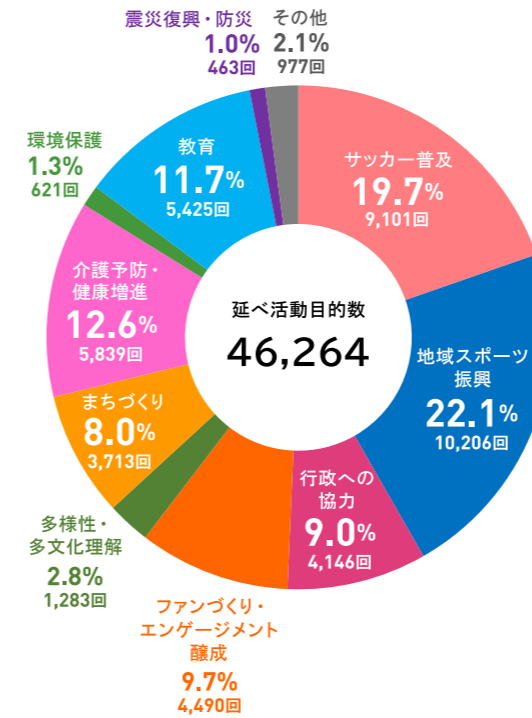
トップ選手の活動人数 **4,379人**

※「活動者」および「協働者」は、1つの活動につき複数選択となるため、のべ活動回数が表示されています。



ホームタウン活動、チャレン!活動とSDGsの関連性

ホームタウン活動の活動目的数(のべ)



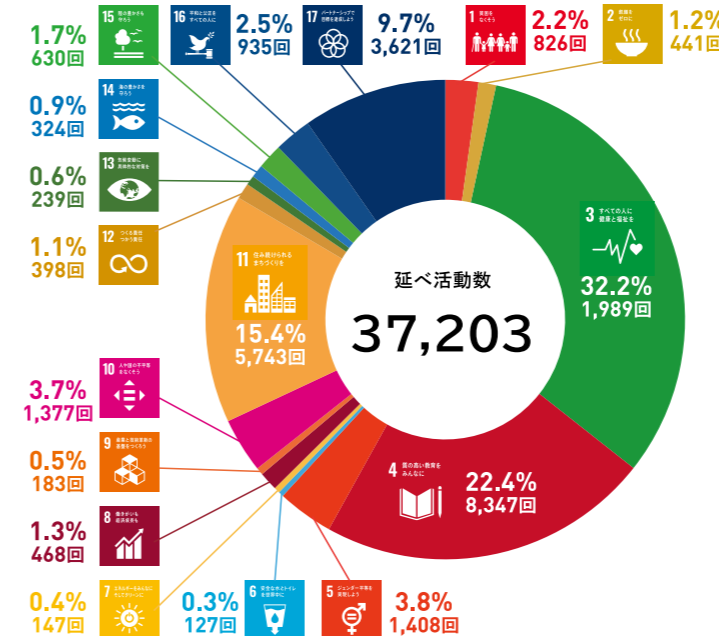
選手や監督、クラブスタッフを起用したサッカーの普及活動、地域スポーツ振興活動、介護予防や健康増進を目的とした活動の割合が高い。

スポーツ振興活動の中では、Jリーグが理念を推進する活動の総称「Jリーグ百年構想 ～スポーツで、もっと、幸せな国へ。」という言葉掲げて本格的なスポーツ振興活動に着手した1996年ごろに開始された息の長い活動も含まれる。



写真提供:ヴァンフォーレ甲府

SDGsに当てはめたのべ活動数



ホームタウン活動やチャレン!活動をSDGsに当てはめると、「全ての人に健康と福祉を」をゴールとした活動が約3割を占め、「質の高い教育をみんなに」「住み続けられる街づくりを」が約2割と続く。これは、サッカー普及活動、地域スポーツ振興活動などが多くの割合を占めること、活動の場がホームタウンの小学校など子どもたちを対象としていること、サッカーやスポーツの普及・振興に教育の要素を付加していることそして、ホームタウン活動そのものが地域振興を前提としていることが要因だと考えられる。

ホームゲームやクラブの活動において環境に配慮した対策をとっているクラブや、地域ならではの社会解決につながる活動をすることで、多岐にわたる活動を行い、SDGsに当てはめた活動数は、のべ37,203回を超えている。

2023シーズンよりカーボン・オフセットなどを通じて本格的に環境問題に取り組むことにより、気候変動などの環境関連のゴールに向けた取り組みをリーグ全体で増やしていく。

※各クラブが実施したホームタウン活動を、クラブからの報告に基づいて集計しています。
※紐づける「SDGs」は、1つの活動につき複数選択となるため、のべ活動回数が表示されています。

あなたとJの1億通りのかかわり方

スポーツは、不思議な力をもっています

誰かの笑顔のために
人生をかけて生き様を表現する選手
地元の笑顔のために
奮闘しているスタッフ

そんな人たちの熱に触れると
ココロがドキドキして動き出す
ココロが動くと
体が自然と動き出す

自分が本気で挑む舞台はどこだろう？
自分の舞台を選べばいい
祈るのも、声を出すこともいい
クラブを支えるために
ボランティアやパートナーになってもいい
誰のために
何のために
私は動きたいだろう？

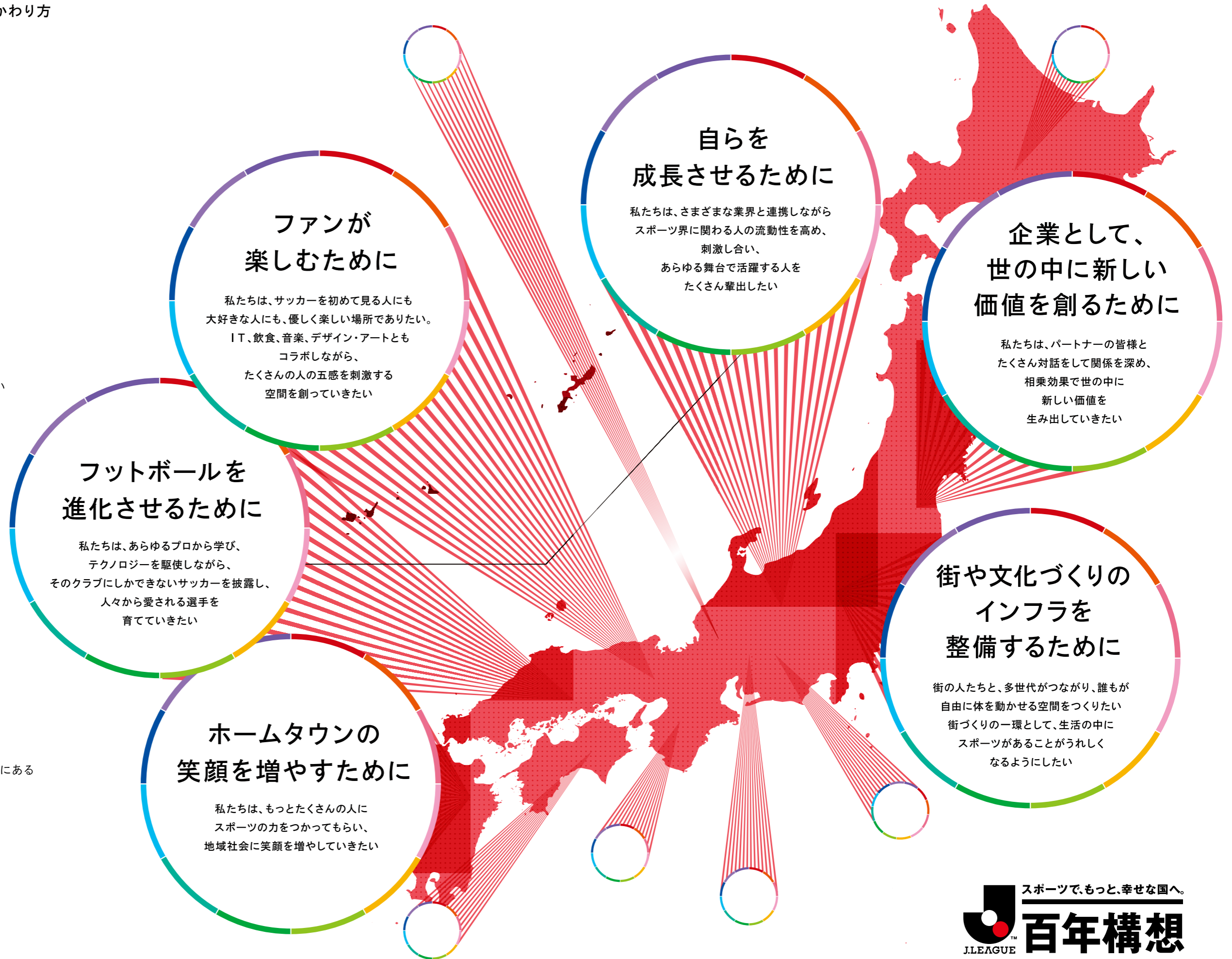
多様な人たちが関わり
本気で挑戦できる場になれるよう
Jリーグも道を開く挑戦を続けます

キーワードは「Jエナジー」

さらっとした熱
じわっとした熱
ごわっとした熱
いろんな熱があっつい
多様な熱が
パスし合える場を日本全国へ

互いの熱を高め合える舞台がJリーグ
新しい道を開いた人に見える世界がそこにある

さて、どう突破しよう？



ファンが楽しむために

私たちは、サッカーを初めて見る人にも
大好きな人にも、優しく楽しい場所でありたい。
IT、飲食、音楽、デザイン・アートとも
コラボしながら、
たくさんの人の五感を刺激する
空間を創っていききたい

自らを成長させるために

私たちは、さまざまな業界と連携しながら
スポーツ界に関わる人の流動性を高め、
刺激し合い、
あらゆる舞台で活躍する人を
たくさん輩出したい

企業として、世の中に新しい価値を創るために

私たちは、パートナーの皆様と
たくさん対話をして関係を深め、
相乗効果で世の中に
新しい価値を
生み出していきたい

フットボールを進化させるために

私たちは、あらゆるプロから学び、
テクノロジーを駆使しながら、
そのクラブにしかできないサッカーを披露し、
人々から愛される選手を
育てていきたい

街や文化づくりのインフラを整備するために

街の人たちと、多世代がつながり、誰もが
自由に体を動かせる空間をつくりたい
街づくりの一環として、生活の中に
スポーツがあることがうれしく
なるようにしたい

ホームタウンの笑顔を増やすために

私たちは、もっとたくさんの人に
スポーツの力をつかってもらい、
地域社会に笑顔を増やしていきたい